

# 複眼による並置比較思考

——ヘンリー・ヴォーン小考（五）——

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) には、二語を接続詞の“and”で結合した標題の作品が、既に一瞥した『復活と不滅』“Resurrection and Immortality”（本誌第二〇一号、二二—二五ページ）を含めて全部で八篇収録されている。同時に少なくとも二つの物・事・現象を見て取り、それらを並置して比較する作者の複眼思考法を端的に示している証左として注目に値いしよう。その一篇は、この詩集の中でも一四四行という最長篇の次の作品である。

## 規則と教訓 Rules and Lessons

(一)

初めてそなたの〈眼〉の覆いが外れる時 〈魂〉にも  
同じことをさせてやろう、我らの〈肉体〉は唯 前触れと  
なるだけだ 霊の務めの。〈真〉心は広がり その  
〈神〉へとうねり昇つてゆく 花々が〈太陽〉へとそうなる  
るように。

だから最初にあのかたのことを考えよう そうすれば  
そなたは

終日あのかたと共にいて 彼の中で眠れるだろう。

それでも〈太陽〉は決して眠らせないでおこう、

〈祈り〉が昼間のうちに兆す筈だ、厳肅な時間が定まる  
天国と我らの間に、〈神授の糧〉は傷んだのだ

《日》の出後は、陽が高くなると小麦粉は変色する。

起きて《太陽》に魁<sup>(3)</sup>よう、眠りは罪の過剰を妨げる  
それで天国の門が開くのだ、この世の門が閉る時に。

仲間たちと共に歩こう、心に留めよう、彼ら<sup>(4)</sup>の  
間の静寂と囁きを。《泉》はないし かといつて

《葉》もないが 彼の《朝》の讚美歌は歌う、《灌木》と  
《榎の木》はどれも《我在り》を知っている。そなたは歌

えないのか？

おお そなたの《心配事》と愚行の数々は放っておこ  
う！この道を

行くがよい、そうすれば そなたはきつと終日栄えて  
いられよう。

世間の前に《神》に仕えることだ、彼を去らせるなら  
そなたが祝福を受けて 全てを

彼に委ねてからだ、そして忘れないでおう 誰<sup>(5)</sup>が  
格闘することで支配していたかを 《太陽》が輝く前に。

石に《油》を注ぎ 己が罪のために泣いてから  
旅立ちたまえ、そして眼を天国に据えることだ。

《朝な朝な》は《不可思議》だらけ、最初の《若さ》

人間の《復活》 それに未来の《薈》

彼らの誕生のうちの経帷子。生命、光、真実の《冠》が  
彼らの星を あの石と隠されていた食物を 鎮めた<sup>(6)</sup>のだ。

三度祝福が彼らに訪れるが そのうちの二度は  
移る筈だ、祝福のせいで我らは敬虔に、幸福に、富裕  
になる。

世間が起きて全ての大群が広まる時には

平静を保ち、《土》の各々と混り合つてはならない、

必需品を急送しよう、人生は重荷を負っており

それは担ってゆかなければならず しかも安全にだ。

更にこういう配慮は自分自身には除外したまま 心は  
《神》のものだけにして しかもその大半は選ばなく  
てはならない。

全て自らの《行動》、《勧告》、《談話》のせいで

《寛容》と《宗教》によって導いてもらうことにしよう、  
真実が自分のものならどうして野蠻な力が必要だろうか。

しかし善良でも公正でもないものは決して認められない、腐った杖のために自分の〈良心〉を損つてはならない。利得は恐しいものであり 精神に病をもたらすのだ。

〈神〉に、自分の〈故郷〉と友人に、真実であれ、たとえ〈牧師〉と〈人々〉が変化しても そなたは己が地盤を保つのだ。

〈宗教〉を売る者は〈ユダのユダヤ人〉<sup>(7)</sup> そのものだ、それに誓いが一たび破られると魂は健全ではいられない。

偽証する者は野放しにされた悪魔だ、何が

彼の手を縛り上げられようか 〈神〉と人間を敢えて嘲るのでは。

〈群衆〉と同じ歩みを求めてはならない、そなたは

自らの確かな速歩にしがみつがよい、〈不断の〉謙虚な心は

その人自身の〈喜び〉であり 彼の〈造物主〉のそれでもある。

愚行でそれを汚したり 遅らせたりしてはならない。<sup>(8)</sup>

正しい魂の中の甘美な自己の秘め事は

〈大地〉に収まり切れなくなり 窮極点に達する<sup>(9)</sup> になる。

そなたを求める者には誰にでも 心を開くがよい、そなたの胸のうちを〈迷宮〉や〈罨〉<sup>(10)</sup> にしてはならない、そうすれば試鍊が訪れてもそなた自身は善良でいられよう正直であれば安全なのだから 何が起きても。

それは善人の御馳走なのだ 花々の王子は、嵐の中で繁茂し 驟雨の後で最も芳しく馨るのだから。

貧しい人々から〈眼〉を逸らし閉ざすことなく 彼らの〈取り得〉に應じて自らの〈財布〉を与えるがよい、

そなたは〈檻樓〉の中に強力な〈王子〉を解放できる<sup>(11)</sup> だろう、<sup>(10)</sup>

彼は、そなたの罪が呼び寄せても、〈呪い〉を払いの<sup>(11)</sup> けるのだから。

そなたは貧者の一灯を失ってはならない。水は曲り流れても

我らが投げ与える〈パン〉は ある日船荷となつて戻ってくるのだ。

更に一時間泣くことになるような一時間は過すな、

涙は自分自身のものではないのだから、もし言葉に出すとしても

自分の友人や〈天国〉を落胆させないでおこう、お押し殺そう

マムシの毒の考えは。ある〈音節<sup>シラブル</sup>〉は〈剣<sup>ソーズ</sup>〉なのだ。

馬銜<sup>はみ</sup>を噛ませてない言葉は 二重の贖罪を課され、

その所有者を恥じ入らせ その聴き手を二重に辱める。

慎しい血を傷つけないでおこう、その靈力は

審判の際に〈淫らさ〉に立ち向かうのだから。卑しい才気だ

汚物と悪臭しか放出しないのは。そなたに褒美はないのか  
病気が感染しか？ そのようなものの息の根は止めてしまえ。

罪を笑う物にする者は 少なくとも たとえ悪魔そのものではないにしろ〈獣〉よりも悪い筈だ。

それに友人は避けてはならない たとえ実際それに値するにしろ、

そして彼の〈熱望〉は満たし 自分の〈渴き〉は癒そうと

したまえ

君たちの〈喜び<sup>12</sup>〉が〈宗教〉になるように、それが叶えば  
大急ぎで

その同じ当人を連れ戻そう、そなたが最初だった。

そうして戻らない者は しかるべく祈ることが出来ず  
自らの扉を閉ざし、〈神〉を一晩中閉め出すのだ。

自らの〈信仰心〉を高め 反抗の思いは悉く

低く押さえておくためにも その前にどのような仕事を

〈神〉がなさっているのかその有様を見てみよう、ここに  
は泉が流れ、

〈小鳥〉が歌い、〈獣〉が餌を食らい、〈魚〉が跳ね、確固  
たる〈大地〉がある。

上では動きに休みがなく 〈光〉は走り回り、  
広く大きいのだ 〈取り囲む紺碧〉が、目眩く〈雲〉  
が、昼も夜も。

〈四季〉が変化する時には 〈眼〉前に並べてみよう  
彼の御方の素晴らしい〈手法〉を、注目してみよう

天上の様々な〈光景〉に、〈霞〉〈雷〉〈虹〉〈雪〉〈氷〉

〈風〉〈嵐〉〈光〉に闇に、彼の思うがままなのを。

そなたは彼の〈賞讃するもの〉を見落すわけにはいかない。

木、草、花の各々は 彼の知恵の、そして彼の〈力〉の影だから。

そなたの訪れる時に出来る事に對して彼を讃えよう

〈腕〉でそなたを満たして下さったのだから。十分に

受け取って感謝しよう、おお 彼のなさり方を讃美しよう  
世の中の空<sup>から</sup>にならない貯蔵庫を一杯になさるのだから！

感謝せずに食べる人は〈盗人〉であり 彼の御馳走は  
〈強盗〉そのもので、彼自身は客人ではない。

全盛期はこうして過ぎ去った、そなたの時は衰退する、  
他の考え方をしてみよう、友人たちや陽気さは追い払おう  
〈太陽〉は今 屈み込み 己が光線を隠そうとする  
暗闇と憂鬱な〈大地〉の下に。

殆どがそなたの〈終り〉の先触れなのだ。そなたは  
〈上昇〉、高さ、それに〈下降〉もごく僅かになつてし

まったのだ。

それでも尚、彼を見習うようにすれば巧くいく。自らの

〈光線〉を全て家へ持ち帰ろう、〈ランプ〉を手入れし  
〈油〉を買って

それから出かけよう、こういう備えをしていれば〈凋落〉  
も

その人の栄光を促進するし、死を撃退する。

人間は〈夏の日〉なのだ、その若さと火は  
輝かしい〈夕べ〉には冷えて〈消失する〉。

夜になったら一日の行いを列挙しよう、〈天国〉と

自分との間の道を明白にしよう、手間取って塞いだりせず  
眠る前に全てを完璧にしよう、そして言うがよい

我が日々の〈数珠玉〉に繋がれた〈太陽〉がもう一つある  
のだと。<sup>(13)</sup>

善なるものを〈喜び〉のために記録しよう、悪は巧く  
識別して

涙と共に洗い流し、そなたの〈主人の〉手を得よう。

そなたの《評価》はこうして為されたのだから 墓場で一

時間費やそう<sup>(14)</sup>

そなたの時間の尽きる前に、そこでは他所者であつてはならない

生涯眠ることになる所なのだ、《人生》の貧しい花は時には一晩と保たない。悪霊が恐れるのは

こういう《親交》。しかし善人は横たわるのだ  
死ぬ前に多くの日々を墓に収められたまま。

眠りの装いで横になり《眼》は《閉ざ》さずにおこう

自らの《カーテン》で。自分の魂に翼を与えよう

何か善いことを考えながら。そうすれば一日が始まり

そなたが自分の火を掻き散らす時、その火花がもたらしてくるだろう

新しい炎を。その上 炎が宿る所では熱が虚しく悼み

死ぬ。<sup>(15)</sup>《神》の居ます《茂み》は、燃やしてはならない。

《転た寝》が終つたら自分の火を掻き立て掻き散らそう

あの死んだ時代の中に。闇の中の一条の光線は打ち負かす

のだ<sup>(16)</sup>

昼日中の光線二条を、だから《落胆》と夜の《痛み》から  
そなたの木の葉は閉め出そう、《純潔で》あれ、《神》は窺  
っている

真暗闇の夜から、その時《太陽》は遙か遠くでも  
そなたは《真昼》の仕事をして《星》を昇らせたまえ。

手短かに言うが、自分がしてもらいたいようにせよ、

《神》を《愛し》、そなたの《隣人》を《愛せ》。《凝視め》  
て《祈ろ》う。<sup>(17)</sup>

これらは《御言葉》であり生命<sup>いのち</sup>の《仕事》。これを行つて  
生きよ。そうでない者は《天国への道》を失つたのだ。

おお それを失うな！ 見上げよ、あの《光》は《変  
る》だろうか

《闇》の《鎖》と《永遠の》《夜》のために？

〔M・四三六―三九〕

#### 訳注

(1) ヴォーラの祖述した散文『オリヴ山、即ち孤独な祈  
禱』The Mount of Olives: or, Solitary Devotions. 1652.

「オリヴ山」と略記」の読者への序文の中で「日常生活のための通常の教訓、倫理の断片、こういうものは既に私の宗教詩の中で簡潔に可能な限り述べた」と書いている「M・一四〇、二八―三四行」。形式の点では、G・ハーバートの「教会の入口」<sup>56</sup>「The Church-porch」〔六行詩七七連、計四六二行の長詩で、各連 a b a b c c の型で押韻する。Wil・四七―八三〕を参照「各行弱強五歩格で全く同じ押韻」〔M・七三六〕。

- (2) 「出エジプト記」16・19―21〔F・一九二〕。モーセの言に従わずに翌朝まで残しておいた人々のマ〔N〕ナは臭くなり、陽が高くなるとそれは溶けてしまった。

- (3) 「知恵の書」16・28「我らは御身に感謝するために陽が昇るより早く起き、光が差す前に礼拝しなければならぬ」〔F・一九二〕〔M・七三六〕。

- (4) ここからの四行については次を参照せよ。「復活と不滅」(本誌第二〇一号、一三―二五ページ)「魂・2」の部分の注(d)及び、弟トマスの著 *Anima Magica Abscondita*, 1650, p.53 の文章を「M・七三六」。

(d) 「今やこの〈宇宙〉全体は…命の一つの魂である…この〈宇宙〉には死んだものは何一つ存在しないし、決してなかったし、決してしないであろう…分解は死ではない、それは結合されていたものの単なる分離にすぎない、分解するが滅ぶわけではなく、新しくなるのだ」。

Thomas Vaughan, *Anthroposophia Theomagica*, 1650. 「読者への著者の言葉」には「無知はこういう解放に〈死〉という〈名前〉を与えるが、適切にはそれは〈魂の誕生〉であり、魂の〈自由〉に役立つ〈証文〉なのである」〔M・七二九〕。

トマスの著、「〈夏〉には〈野原〉に身を移すがよい、ここでは全てが〈神〉の〈息吹〉で緑色になっており、〈天国〉の〈諸力〉のせいで瑞々しい。〈自然〉は悉くその〈霊的なもの〉のせいだと思ふようになるがよい、 *per viam Secretioris Analogiae*」〔M・七三六〕。

- (5) 「創世記」32・24―26のヤコブ。彼はベテルに建てた石の記念柱に油を注いだ、「創世記」35・14〔F・一九二〕。夜明けまで神と格闘したヤコブは、そこをベヌエル(神の顔)と名付けた。

- (6) 「ヨハネの黙示録」2・17〔M・七三六〕。「勝利する者には、食べられるように隠されたマンナと白い石を与えよう、その石にはそれを受ける者以外には誰にも分からない新しい名が記されている」。

- (7) *a Judas Jew*. G・ハーバートの「自責」<sup>57</sup>「Self-condemnation」〔六行詩四連、計二四行の作品、Wil・五八四―八六〕の一七―一八行を参照「M・七三七」。「何故なら彼は己の金のために、己の尊い〈主〉を売ってしまった／だからユダのユダヤ人(a Judas Jew)のようなものだ」。

【M・七三七】。

- (8) lag behind. G・ハーバートの「忠誠」“Constance”[五行詩七連、計三五行の作品、W i L・二六二―六五]の十行目に同じ語句 (lags behind) がある【M・七三七】。

- (9) lines, 「測地線」“a measuring-line”の場合のように “reaches” の意 (OED, v<sup>2</sup>, 2) 【M・七三七】。

= extends to 【L・一九三】。

- (10) 〆〆からの二行をハッチンソンは、G・ハーバートの「捧げ物」“An Offering”[前半は各行十音節ずつの六行詩四連、後半は変った形の六行詩四連から成る作品、W i L・五〇八―一一]の一一―一二行と比較する。「公の判断では人は国家となり得るもので／災難を払いのける (fence a plague)」、他人が眠り、まどろんでいる間に」。即ち、人は、支配者とか君主は、国家の代表となって自らの仲介によって災難を払いのける、という意【M・七三七】。
- (11) fence, = repel, ward off. 「防ぐ、かわす、撃退する」【F・一九三】。

- (12) 〆〆からの一四行、ルクレティウス (Lucretius, v. 1191-3) を参照【M・七三七】。ティトゥス・ルクレティウス・カルス (Titus Lucretius Carus, 96?-75 B.C.) の唯一の著作『事物の本性に就いて』*De Rerum Natura* の第五巻の一一八―九三は次のようになってゐる。「そして、天上に神々の座と住家をおいた。／なぜなら、天上をこそ夜

と月とがめぐると見えるのだから、／さらに月、日、それから夜、それから夜の厳かな星座、／夜空を彷徨う火、空とぶ炎、／雲、太陽、雨、雪、風、雷、電、／それから突然起る轟き、それからおとしつける大きな唌りまでも」。(藤沢令夫・岩田義一訳。世界古典文学全集21、筑摩書房)

(13) G・ハーバートの「日曜日」“Sunday”[七行詩九連、計六三行の詩、W i L・二七〇―七五]の二九―三〇行「人の生涯の日曜日は／時の紐に一緒に繋がれて」を参照【M・七三七】。

- (14) この連、G・ハーバートの「教会の記念物」“Church-monuments” (教会の建物内にある墓や墓石) [六行詩四連計二四行の詩、M i L・二三四―三八]と比較せよ【M・七三七】。

- (15) 「出エジプト記」3・2【F・一九六】。モーセが神の山ホレブに来ると、茂みの中から燃え上がる炎の中に主の御使いが現われる。

- (16) dead age. Feltham, *Resolves* i, 47. “Of Death.” 夜の死んだ時代に、肉体が《死》の悲しい灰色の表情を帯びるのを、そなたが見る時」と比較せよ【M・七三七】。

- (17) *Doe as thou wouldst be done unto, Love God, and Love thy Neighbour; Watch, and Pray.* G・ハーバートの「神性」“Divinitie”[四行詩七連、計二八行の詩、W i L・四六八―七二]の一七―一八行の順序を入れ換えて引用したもの。



ハーバートの詩は、Doe → Do, thou wouldst → ye would,  
Love thy Neighbour → love your neighbour, Pray → pray.

フリーデンドライヒの指摘を俟つまでもなく第一五―一六連などは、「詩人の眼がまるで時間経過を捉えるカメラ」の働きを示して天候の激しい様々な変化を喚起させる箇所、確かに「周囲の風景の美と恐しさに対するヴォーンの鋭い感覚を表している例」「F・K・四六」だろう。こういう部分も混入させながら、人間が生きてゆく日々の「規則」とでも言えそうな「教訓」を並べたものである。「そなた」への提言の形で、作者は自戒の言辞を連ねたとみえる。この作品から六篇目に、同じようにイタリック体の“and”<sup>二</sup>二語を繋ぐ標題の詩が現れる。

### 混乱と脆さ Disorder and frailty

初めて御身が墓と闇の子宮からさえ  
私の粗野な魂を差し招き  
御身の奴隷になさった時 御自身は  
導き手になり〈見張り〉となられた、

その時間からさえ

御身は私の心を捉えられた、そこでここでは  
風に吹き上げられ 霜に打たれて

私は嘆き たじろぐのだ

御身と私の

繋りを壊すのを、そしてしばしば かつての  
沈黙へ 死んだような眠りへと 這い込んでゆき

長い一日 四六時中

御身の道から離れるのだ

それでも確かに、〈神〉様！私は御身を最も愛している  
ああ、どうか御身の愛を！

### 2

私は天国を脅かす、そして私の〈土〉の

〈庵〉と脆さから離れ、御身の火と

息吹きに触れた蕾から離れる、御身の血

もまた 私の〈露〉であり 進る戸戸なのだ。

しかし私が成長して

御身に手を伸ばして 御身の

星の悉くと雲母のきらめく大邸宅を目指す時

飛翔のたびに毒を

味わい 枯らすことになる

私の豊饒な葉を、時々驟雨に

すっかり打たれて散ることもある、そして一時間もすると

弱々しい若枝ではなく

裸の根が

地下に隠れていて 落下の後も生き残る。

ああ、何と脆い雑草よ！

3

こうして睡眠中の〈水蒸気<sup>(1)</sup>〉のように

(それは熱によって呼び覚まされて光を放ち

カンフラター

あの〈聖<sup>カンフラター</sup>霊

である〈太陽〉に近づいてゆき  
高々と舞い上がり輝く、しかし我らが夕食を取って

二歩と歩かないうちに

夜の湿気に冷やされて降下し、

それが噴き出した所へ来てそこで終る)

私の弱々しい火は

嘆き 後退する、

そして(私の炎がすっかり高まった後)

病人の〈息遣い〉をしながら従順になる、

私を最初の寝台の

上で死んだままにして

御身の〈太陽〉が再び昇ってくるまで。

憐れ、落ちてゆく〈星〉よ！

4

おお、そうだ！しかし私の火には翼を与えて<sup>(2)</sup>

私の魂を孵したまえ、それが御身の居ます所まで

飛んでいって 御身の〈星々〉の輪金の

間に、〈病弱〉を越えて至るまで。

ひねくれた愚かな

考えを私の厚かましい罪の

〈明細書〉に付け足して あの子を

〈殺さ〉ないようにしよう、

御身が私の中に撒いて

恩寵で以ってその種子共々その土地を

耕して水を注ぎ賜うたのだから、

だから私の命のために

命を賭けて亡くなった

御方のために 御身の意志に合わせよう<sup>(3)</sup>

私の心を、私の詩歌を。

「ホセア書」第六章第四節<sup>(4)</sup>

おお、エフライムよ、私はお前をどうすればよいのか。  
おおユダよ、お前を如何に扱えばよいのか。お前の善は  
朝の雲のようだし、早々と消える露のようだ。

〔M・四四四—四六〕

訳注

(1) Exaltation. の行以降、ヴォーンの別の詩「アモレット」に、彼との及びその他の恋人たちとの違い、並びに真の「愛」とは何かについて「夕べの冷たくなってきた翼が／苦痛に呻く空気を煽る時、注目しよう／弱々しい（太陽）が自ら始めたことを／終らせないままにしている有様を」と始まる、七行詩三連、計二一行の作品（ヴォーンが、ユウエナリスの第十諷刺作品を英訳したものを付載した最初の『詩集』(Poems, with the tenth Satyre of Juvenal, 1646.)に収録した—M・一二〕と比較せよ。

更に、G・ハーバートの「私の慰めは落下して雪のように溶けてしまふ」と始まるソネット「答」"The Answer"。

〔W・L・五七九〕の八—一二行と較べよ。

「若い水蒸気 (exaltation) が新たに目覚めて／その発生源の汚れた床を軽蔑し、空を目指すように、／しかしその途上、冷えて膨れてゆるやかに／雲へと固まってゆき生きたり死んだりする／あの暗い涙の姿となって」。この五行、「ヤコブの手紙」4・14「あなた方の命とは何か、それは水蒸気にすぎず、束の間現われてやがて消えてゆくのです」と比較せよ〔W・L・五八〇〕

尚、W. Scott Hemmick では、この現象が次のように説明される。「月の下方には別種の滅んでしまふ 自動力のない星々が存在し、それらは僅かな時間しか存続しないように造られていて、地球自体から水蒸気 (exaltations) として昇っている。我々にはそれらの溶解を自分自身の眼で見ることが出来る。：それらは天国の領域には達しない：自らの物質によつて引きずり降ろされて素早く四散し壊れて再び地上に降下し、地球上の空気を掻き乱すことしかしてこなかったのである」——以上〔M・七三八—三九〕。

(2) 私の火には：飛んでいつて。G・ハーバートの「聖霊降臨日」"Whitsunday"〔四行詩七連、計二八行の詩。W・L・二二—二四〕の第二連四行と比較せよ〔M・七三九〕。

「可愛い（鳩）よ 私の歌に耳を澄して／私の中にそなたの黄金の翼を拡げておくれ／長らく私の優しい心を瞬し

ながら／それが翼を得て そなたと共に飛び去るまで」。

(3) tune...verse. ヴォーン の四〇行の詩「苦痛」“Affliction”

「M・四五九—六〇」の最後の四行参照「M・七三九」。

「彼の胸の調子を合わせて上昇させたり下降させたりしながら／そして聖なる必要な術によって／弦のようにあらゆる部分を引き伸ばして／その全体をこの上ない音楽に満ちたものにする」。これはG・ハーバートの「気性」一“The Temper”（二）「四行詩七連、計二八行の作品、Wil・

一九三—九四」の第六連と比較せよ「M・七四一」。

「やはり御身の道を取りたまえ、確かにその道が最上なのだから／引き伸ばしたり縮めたりしたまえ／これは唯私の胸の調子を合わせて／その音楽をもっと良くするためだ」。

(4) ジュネーヴ版を使用、但しその“your”を“thy”に“morning”を“early”に変えし「F・二〇四」。

自分を招き導き見張ってくれるイエス・キリストに体现された〈神〉、その〈神〉の道からともすれば「脆さ」故に「混乱」して、あるいは、「混乱」したために「脆く」なって離れようとする自分を鼓舞して、〈神〉の意志に自らの心と詩歌を合わせようと述べる。

各連共、A B A B（第二連はA B B A）C D D E E F

G D D Hの型の押韻構成で、各行の音節数はいずれも順に9 8 8 8 4 8 6 4 4 8 8 4 4 8 4の整然たる形式の一五行四連、計六〇行の詩。水蒸気（exhalation）が人間の善の弱さ、儚さを表す重要なイメージの作品である。

次に、初めの語をコンマで切った上、並み字体の“and”で別の語を繋ぐ標題の作品が五篇ある。収録順にみてみよう。

まず、十音節の二行連句と四音節一行の一固まり十組を十音節の二行連句で締め括る三二行の作品で、四音節の行も順に二つずつが押韻する整然たる詩型である。

人間の墮落と、回復<sup>(1)</sup> Mans fall, and Recovery

さらば汝ら〈永遠不朽の〉丘陵よ！私は〈投げ込まれた〉ここに〈雲〉の下に、そこでは嵐と暴風雨で萎んだ

この色褪せた花が

持ち前の〈静けさ〉を奪い取られて 私もこうして移植できないでいる 目覚めた彼の葉の一枚を

しかしいつもの時間も

彼は眠って項垂れており、このうとうとした姿のまま私をさまざまな情熱と宿命の奴隸にしておくのだ。

おまけに私は失ってしまった

一連りの光を、それはあの〈太陽の輝く〉日々には私を確かに導いてくれた、それで私の許にだけ留まっている

(私には迷惑ながら)

一条陰鬱な光線が、その任務は分配することだ私の感覚に 知識より処罰を。

二千年間

私はこうして留まった、遂に〈ジェシュランの<sup>(2)</sup>王があの有名な石板をシナイ山から持ってきた、

これが膨らませたのだ 私の恐怖を

罪悪感を 道義上の違反を この〈内なる畏怖〉を全てというのも罪が〈律法〉から力と活気を奪い取ったから。

それでも私は見つけたのだった

豊富な方法を (あの聖なるかたの御陰で！)

いやしくも石に書かれたもの悉くを取り消すための道を、

彼<sup>か</sup>のかたの 救いに導く傷は

血を滴らせて この〈アダマント<sup>(4)</sup>〉を壊し 与えたのだ

罪人たちに〈自信〉を、墓に生命<sup>いのち</sup>を。

それで私は一望に

我が父の旅路を収め、しかるべき一步で彼らの巡礼を全て了えて この世の勤めを凌駕する、

何しろ〈神〉が(人間を造られた)

信仰の仕事の〈範圍〉を縮小されたのでそれで生れたのだ彼らの〈紅海〉から〈泉〉が。私は手を洗い 彼らは渉る。

「ローマ人への手紙」第十八章第十九節<sup>(5)</sup>

一人の罪によって全ての人に有罪の責任ありとされたように、一人の正しい行為によって全ての人に善行ありとされて命を得ることが正当とされたのである。

〔M・四一——一二〕

訳注

(1) 「ローマ人への手紙」5〜7との関係に注目〔M・七三

〇〕。パウロがローマの信徒へ送った書翰のこの辺りは、信義による義、内在する罪、律法と信仰などについて、くどくどと説かれているが、「苦難は忍耐を生み出し、忍耐は経験を、経験は希望を」(欽定訳、5・3〜4)などは簡潔で印象深い。

(2) *Yeshunus*. イスラエルの人々を表す詩語〔F・一五九〕。

この王は、無論モーセ。

(3) tables. = the tables of the Decalogue. モーセの十戒を刻んだ二枚の石板。十戒のうちⅠ～Ⅳまでが一枚目に、Ⅴ～Ⅹまでが二枚目に刻まれている。

(4) Adamant. 何物にも侵されないとされた伝説の石。古くはダイヤモンドと同一視された。

(5) 「十八」は「五」と読め「M・七三〇」。この章節数は誤りで、実際はジュネーヴ版の第5章第十八節。但しヴォーンは、ジュネーヴ版の“justifying”「正当化」ではなく“righteousness”「正しい行為」を使っているが「F・一五九」。

人間の墮落と回復について想いを巡らせた作者は、次に、神の受肉と受難に思いを凝らす。八音節の四行詩五連から成る二〇行の詩で、各連ともA B A Bの型の韻を踏む。これも前掲作同様、具体的なイメージが躍動して生彩に富む作品ではないか。

### 受肉と受難 The Incarnation, and Passion

〈主〉よ！御身が自ら着物を脱いで<sup>(1)</sup>  
栄光の衣服を纏い 全力を尽して  
我らをもっと大きくしようとされた時、御身は更に

小さくなって 悲しむべき物語になられた。

光の代りに〈雲〉を着て

明けの明星を埃で覆い隠すのは

御身の中でしか決して表現されたことのない  
ような高みを 移し変えることだ、

素晴らしい虫共と〈大地〉よ！こうして出来たのだから

〈神〉なるものを汝らの〈細胞〉の中に〈包む〉ことが

汝らの造り主を墓の中に監禁することが、

生命を死の中に、天国を貝殻の中に閉じ込めることが、

ああ、我が尊き〈主〉よ！何を御身は探られたのか

この不純で不逞な土の中に<sup>(2)</sup>

毎日御身を殺す人々のために

御身をこのように死のうと決意させた土に。

お何と奇妙な不思議な事どもか 御身を動かして  
御身の貴重な血を 息遣いを 蔑ませたとは！  
確かにそれは〈愛〉だった、我が〈主〉よ、〈愛〉は

唯 死より遙かに力強いだけなのだから。 [M・四一五]

## 訳注

(1) 最初の六行については『オリーブ山』の次の文章を参照のこと。「彼が〈父〉の胸を去って飼ひ葉桶の中に安らぎ、彼の栄光の衣服によってアブラハムの種子を撒かれて〈不滅〉で包まれようとした様子を思いみよ」[M・一五七、三六―九行]。

「何といそいそと（おお聖なるイエス様！）御身は栄光の衣服を脱いで御身自らを肉で包まれたことか、後に我らの罪の贖いとして御命を捨てようとして」[M・一六一、四一―四三行]。

及び、G・ハーバートの「袋」The Bag, 「六行詩七連の計四二行の「特異な」作品。直接の源泉はないものの多くのバイブルの章句に依拠している。Wil・五一九―二〇」の九―一二行と比較せよ。「力ある〈神〉は栄光の莊重な／衣を纏って上ってゆかれた時のように／上って降りようと決意された、それで或る日、／かの御方は下ってゆかれた、道々ずっと衣服を脱いだまま」[M・七三一]。

(2) Ogar, (詩語) 人間の肉体が造られたと考えられた土。「ヨブ記」33・6「見よ、神の前ではあなたの望みに従って私も土から造られている」。頻繁に使われる。

「受難」については単独でも瞑想されているのでその作品をここで見ておきたい。

## 受難 The Passion

おお我が最高善よ！

私の貴くもこの上ない〈神〉よ  
おんみ 御身の神聖な血が

力一杯〈答〉を振われて〈迸り出〉た時  
はははは

一打ちごとに如何なる苦痛を

御身は感じられたことか！

どれほど御身は泣き賜い

自らを浸されたことか

御身の流す貴い救いの涙の中に！

何たる残忍な痛みが

御身の心を引き裂いたことか！

それを御身はどれほど

呻きに出されたことか 霊の中で、

おお御身、我が魂が〈愛し〉怖れるかたよ！

2

この上なく神聖な《蔓植物》<sup>(1)</sup>よ！

その果汁は大層結構なので

私は《葡萄酒》のようだと感じる、

しかし汝の美しい枝々は血のようだと感じられた、

どのように御身は押しつけられたことか

私の目の保養になるようにと！

何たる深い苦痛のうちに

御身は衰弱なさったことか、

《汗》と血の何たる泉が御身を溺れ死なせたことか！

どのようにして一本の小徑に

御身の偉大な《父》の

怒りが丸ごと

群がり集つて

御身の悲痛を二重にしたのか 誰も御身に服従しようとし  
なかつた時！

3

我ら罪びと全ての

重荷と死とが

一体となつて

どれほど振じり<sup>ね</sup>《苛んだ》<sup>さいな</sup>ことか 御身の神聖な手足

を！

どれほど蒼ざめ血に塗れて<sup>まみ</sup>

みえたことか 御身のお《からだ》は！

どれほど傷つき折れたことか

激しい一打ちごとに！

何と柔和で我慢強かつたことか 御身の精神は！

どれほど御身は叫び

激しく呻かれたことか

御父よ許したまへと

そして彼らを生かしたまへと

私が死ぬのは我が敵どもに受け継がせるためだと！

4

おお神聖な《小羊》よ！

我が罪を背負つて下さつたのだ、

我が恥を引き受けて下さつたのだ、

御身の埃は どれほど御身を讃え歌えばよいのか！



私は私にあつて欲しいのだ

一滴の心からの涙で！

一つの絶えざる泉で！

そうすれば私は御身に

二つささやかな物を持つてきて反目することになるだろう

それは私の心か眼と

この上なく競い合う筈で

私に長の年月 教えてくれることだろう

微笑みながら 涙にくれながら

泣くようにとか、歌うようにと、御身の〈死〉を、私の  
〈生命〉を。  
[M・四三〇—三二]

## 訳注

(1) 111からの四行、G・ハーバートの「苦悶」"The Agony"  
"nie" [六行詩三連、計十八行の詩、W・L・一八—二  
一]の最後の二行「愛はあの爽やかでこの上なく神々しい  
液体で／我が〈神〉が血だと感じ賜うもの、だが、私は、  
葡萄酒のようだ」と比較せよ「M・七三五」。標題の  
「苦悶」は、とウィルコックスは言う、キリストが磔刑の  
前夜ゲッセマネの園で味うそれをまず指すが、ヴォーンが  
散文の瞑想『オリヴ山』で「あのかたの霊の苦悶と血の

汗の滴り」[M・一五七]と述べるものだ。

ABABCCDDEFFGGEの型で押韻する四音節と  
八音節（若十五音節、九音節が混入）の十四行詩四連から  
成る。キリストの受難時の様子とその苦悶を想像裡に  
〈実〉体験しながら、その〈死〉の意味を指針にして「御  
身の埃」である人間の「私」が、「心からの涙」と「絶え  
ざる泉」として〈生〉きてゆこうと、自らを鼓舞するの  
である。

第一部の終り近くに、「巡礼の旅」"The Pilgrimage"を  
挟んで次の二篇が現れる。

## 愛と、鍛錬 Love, and Discipline

まだ不毛ではない土地で

（何故なら御身が恩寵を滴らせて下さるので）

私の運が手に入ったのだから、〈崇む〉べきだ 御身の御

意志は！

それにこの身を切るような霜は 御身の撒かれる

種子の息の根を止めたり跳ね散らす<sup>(1)</sup> 私の中のドクムギを殺してくれるのだから、〈崇む〉べきだ 御身の御腕前  
は！

〈崇む〉べきだ 御身の〈露〉は、御身の霜は、  
だから幸せなことだ私は こんなに十字を切られ  
御身の犠牲による〈十字架〉によって治療されるとは。

その〈露〉は苦しんでいることを〈励まし〉

霜は雑草を摘み取り 枯らす<sup>(2)</sup>、

その両方で 御身は最良の仕事を果されるのだ。

こうして御身の幾つかの慈悲が企まれ<sup>たくら</sup>  
私にある時は冷たく ある時は熱く働きかけながら  
その作用は続き 緩むことがないが、

というのも 御身の手が天候の舵取りをなさる時  
私は喜びと涙との間で最も繁栄し<sup>(3)</sup>

一年中 青々とした〈穂〉<sup>(4)</sup>を得られるのだから。

[M・四六三—六四]

#### 訳注

(1) choke, or spl. = kill, or destroy. 「ブタイによる福音書」  
13・24～30の麦とドクムギの話、参照「F・二二七」。イ  
エスが天国について、麦 (wheat) と毒麦 (tares) を譬え  
に用いて説く箇所。

(2) G・ハーバートの「人間の混成」"Mans medley"「行頭  
に出入りのある六行詩六連、計三六行の作品、W・L・四  
五八—六一」の二八行目「霜と思考は両方共 彼の唇を摘  
んで囁む」と、同じく「職」"Employment" (I)「四行詩  
六連、計二四行の作品、W・L・二〇四—六」の三—四行  
目「私が極度の霜によって／芽のうちに摘れないうちに」  
と較べてみよ「M・七四二」。

(3) 最後の二行は、G・ハーバートの「希望」"Hope"「八行  
の詩、W・L・四二八」の五—六行目「それと共に私は涙  
の一杯詰った瓶を与えた／だが、彼は何本か青々とした穂  
を」と比較せよ「M・七四二」。

(4) green Ears. 「W・L・四二八」は、「希望」を注釈しな  
がら、ヴォーンのこの最後の二行を比較対照として挙げて  
いる。尚、「青々とした穂」は、収穫を約束する表象「レ  
ビ記」2・14。

弱強四歩格の三行連句（全て八音節の詩行から成り、三行ずつ押韻する）六連、計一八行によって、〈愛〉は厳しい〈鍛錬〉で示されるのだと、自らにそして読者に言い聞かせている趣の作品である。

次は、各連共、A B B A C C D D E Eの型の押韻構成で、各行の音節数はどの連も、順に 8 10 10 10 8 4 10 4 10 10である十行詩四連、計四〇行の作品である。

## 律法と、福音 The Law, and the Gospel

〈主〉よ、御身がシナイ山に降り賜い<sup>(1)</sup>

パランの方から輝かれた時、火と燃える〈律法〉が雷を伴って宣告され、御身の威嚇が御身の〈民びと〉の心を和らげた時、御身の雑草が悉く繁茂して

光も、恐怖も、力も

〈近づけなく〉なった時、

哀れな肉体が（御身が衰弱させた後だったが）

どれほど恐れ 卒倒したことか！

御身が〈選ばれた〉一群は 激しい風に揉まれる

木の葉のように 従順を囁き 頭を〈下げた〉のだ。<sup>(2)</sup>

## 2

しかし今 我らはシオン<sup>(3)</sup>に来てこのかた

御身の血によって御身の栄光を見、

子としての〈信頼〉で我らは御身に触れさえる、  
それでも別の山はすっかり炎に包まれていて

今にも降り出しそうな〈雲〉が御身にとても

触れさせてくれようとしないので

我らはここに〈登る〉のだ、そしてずっと保つてもいる

御身の手を我らの支えに、

否、御身が我らの手をお取り下さるのだ、そして（それで

すっかり〈慰められる〉）

御身の〈鳩〉もまた我らを神聖な翼で運んでくれる。

## 3

それでも人間は正に野獣なので

結局は御身の恩寵の〈御振る舞い〉を跳ねつけ、

御身が与え賜うたあの健康を軽んじるが 彼が病んだ時は  
不快に思わないで下さい、〈もしも〉私が毎時間 嘆願

し続けていて 御身の戸口でこのように

もう一度懇願するなら、

おお私に植えつけて下さい 御身の〈福音〉と御身の〈律法〉を、

〈信仰〉と〈畏怖〉とを二つながら

そうしてそれらを私の心の中に織り込んで下さい、そうすればそこですと

私が〈愛し〉ても当然であり、御身への怖れを見い出せるでしょう！

4

私に御身の血を零さずに飲ませて下さい

御身の垣根を壊さずに 黒い〈過度〉によって

〈正当な〉〈呪い〉を抑えつけさせて下さい 御身の手が祝

福して下さる時に

私に私の食べ物をはら撒いたり蔑んだりさせないで下さい

さもなければ あの 私の苦痛を生んだ

尊い手足を再び釘付けにして下さい

そうすれば御身の慈悲は〈必ず〉流れ出すことでしょう、

私が恐れている間に

私には分るのだから、御身が堪え賜うことが、

しかしもし御身の穏やかな〈禁止命令〉が些かも私の心を動かさないなら

私は御身を愛さなかったのだと考え、且つそう〈判断〉することでしょう。

「ヨハネによる福音書」第十四章第十五節<sup>(4)</sup>

もしあなた方が私を愛しているなら 私の掟を守りなさい。

〔M・四六五—六六〕

訳注

(1) *Sinai*. シナイ半島「紅海の北端に位置し、スエズ湾とアカバ湾に囲まれているエジプト北東部の半島」の南部の山。伝説ではモーセが十戒を初め諸律法をここで授けられた(Horeb「ホレブ、神の山」と時に同一視される)。高さ二二八五m。*Paran* は、シナイ山北方の荒野。

(2) この最初の詩節は、〈主〉がシナイ山を訪れて、モーセを通じて〈律法〉を発した時のその山でのイスラエルの経験に対する一連の言及を含んでいる。例えば、「出エジプト記」19、24、「申命記」9・7、29、10・1、5、33・2、参照〔F・二二九〕。

(3) *Sion*. = *Zion*. エルサレムにある丘。ダヴィデが宮殿を築

き、その子ソロモンが神殿を建て、その後長くユダヤ人の宗教・政治の中心となった。

(4) これは欽定訳版とジュネーヴ版は全く同じ「F・二三〇」。

当初は〈神〉を畏怖して律法を遵守して正しく生きようとしても、神に馴れ親しみ神に慈愛を示されているうちに人間は「野獣」なのだから恩知らずぶりを発揮するようになる。故に、福音に浴せるように律法に常に従っていられる状態を希求しなくては、という作品であろう。第二部にもう一篇、今、問題にしている作品が収録されている。

### ヤコブの枕と、記念柱<sup>(1)</sup> Jacobs Pillow, and Pillar

私には見える<sup>(2)</sup> そなたが建てた〈記念柱〉に〈神殿〉が、するとそなたの子供たちが恐れたあの畏怖さるべき栄光が穏やかな澄んだ姿で 響めつ面することなく<sup>(3)</sup> そなたの孤独な自我の上に現われてくる。

〈分離〉を生み出すのは数だ、群衆は野蠻であり  
〈神〉御自身は大勢の人によって身罷った。

このため彼の御方は 雲を火を煙を身に纏ったのであり  
雷鳴の中でそなたの〈子孫〉に告げられたのだ<sup>(4)</sup>、  
その小さな静かな声は とある低い〈小屋〉の戸を叩くが  
強い風がそなたの高く聳える岩々を砕くことになるのだ。

世界の偉大な〈王〉への最初の真物の崇拜は  
密かな選ばれた心から噴き出したが

彼はあらゆる人類を救いたいとその上なく希って  
あの光を増幅し、悪しき人々にも親切にした。

ここから〈万人にわたる〉とか〈普遍的な〉<sup>ユニヴァーサル</sup>とかいった  
甚だ公正な概念が生じたが、正に名称だけだった。

このため豪華な〈真珠〉も もっと並みの石同様、  
一たび公にされても 誰にも尊重されない有様だ。

人間は自らの〈造物主〉を蔑ろにするのだ、馴れ馴れしさが募って、

それで法律を制定して自らの名誉を引きずり降ろす。

これは〈神〉はお見通しだった、それで群衆によって殺された時

(その死を撒き散らした あの堂々たる不可思議な雲の下で) 彼の御方は予告されたのだ その場所と

どのような形で奉仕してもらうかを、もしも真正な恩寵と  
柔和な心とが〈山〉でもエルサレム<sup>(5)</sup>でもない所に  
獣の血と脂肪<sup>あぶら</sup>と共に在るならば。

心はあの畏怖さるべき場所であり、あの崇高な〈小部屋<sup>せしや</sup>〉  
あの秘密の〈箱船<sup>アーク</sup>〉で、そこに温和な〈鳩〉が住んでいる  
誇り高き水が暴れ回る時に、〈異邦人〉が

〈神〉の許しを得て支配し、人間が〈驟馬〉を追いやる時。  
この小さなゴシエンは 真夜中

〈悪魔<sup>サタン</sup>〉の座席共々その〈海岸〉一帯に光を浴びるのだ。<sup>(6)</sup>  
さよう ベセルは〈十分の一税〉を受け取ることになるう

(とイスラエルの石は言う)

そして誓約も理想像も、ゴシエンの敵が泣き叫んでも、  
〈無〉になつてしまふ。

こうしてその荘厳な神殿は 再び〈記念柱〉の中に  
沈み込み、人々から隠されてしまふのだ。

だから栄光あれ、彼の永遠なる〈名前〉に！

この神聖な炎を あのような狭い穴に

宿らせる者は 満足である、遂にはその

強力な腕で 我らの束縛をはねのけるのだから。

しかし幸いだ ヤコブは、尤もそなたの悲しい難儀は  
我らのと正しく同じであり、それ以下ではなかったが、  
そなたへ向かつて一人の兄弟が血に飢えてもいて  
飛んでいったが、その子らはそなたの子らの災いを生み出  
した、

それでもそなたはすっかり孤独のまま悲嘆にくれながら  
石の上石の上で眠っては冷たい安堵だけ見出し出してきた、  
そなたは遙か遠方の〈明けの明星〉から立ち上がった、  
そしてその距離の全てが〈律法〉であり指令であつた。  
しかし我らには、昼夜を問わぬ癒しの〈太陽〉があり  
確かな〈守護者〉がおり 我らを導く光が注いでいる、  
そなたが何を望み何を信じようと 我らには分り感じ  
取れるのだ 友人は最も調法で確実で親切なものだと。  
そなたの枕は予型<sup>タイプ</sup>にすぎず せいぜいでも陰だったが  
我らには実質があり、あのかたの支えで安らぎを得るのだ。

〔M・五二七—二八〕

#### 訳注

(1) 「創世記」28・11～22に基づいている「F・三三〇」。結  
婚相手を見つけるようにとヤコブが、イサクに送り出され

る話柄。彼は旅の途上、石を枕にして野宿するが、その夜夢を見る。先端が天に達する梯子が地に向かって伸びており、天使たちが昇り降りしていた。傍らに立つ神からヤコブは、この土地を与えると告げられた。翌朝目覚めたヤコブは、枕にしていた石を記念の柱として建て、その先端に油を注いでその場所を「神の家」（ベテル）と名付けた。

(2) see. [F・三三〇] は“See”

(3) without a frown. G・ハーバートの「全ての御使いと聖者へ」“To all Angels and Saints”[五行詩六連、計三〇行の作品、W・L・二八〇―八二]の二行目「響めっ面をしない〈神〉の滑らかな御顔を見る」を参照[M・七五一]。  
(4) シナイ山のように。「出エジプト記」19・16以降のように[F・三三〇]。

(5) 「ヨハネによる福音書」4・21―24[F・三三〇]。「婦人よ、私を信じなさい。あなたがたがこの山でもエルサレムでもない所で父を礼拝する時が来る」。

(6) エジプトで闇の災難が続く間、ゴシェン(Goshen)「エジプト出国以前にイスラエル人が住んでいた、エジプト北部の肥沃な牧羊地域」のイスラエル人にだけ住み処に光があった(「出エジプト記」10・22〔23〕[F・三三二])。

(7) 一六五五年版にはここに、星印\*が付され、作者自身の次の注記がある。

\*「オバデア書」I・11「I・10ではないか? F・三三

一」、「アモス書」I・11「M・五二八」。エサウが双生児兄弟のヤコブに不法を働いた話。

三行目（九音節）以外は全て十音節の二行連句から成る五〇行詩。それによって、バイブルの最も有名な挿話の一つを、作者が想像力を駆使して内容豊かに再現してみせながら、「我らのと正しく同じ」ヤコブの「悲しい難儀」に托して作者の置かれた、時の英国の宗教上・政治上の〈兄弟喧嘩〉の現状と行く末に思いを馳せたものである。

「冷たい安堵だけ見出し」すやコブの「石の枕」は、温かい安堵の「予型」、「陰」だったのに対し、我らの現状である〈石の枕〉はそれ自体「実質」なのだど冷厳に請け取り、その上で神の支えを信じて安らいでいようと、己と同朋へ呼び掛けた作品ではなからうか。何事にしろ如何なる場合にしろ、事態の悪化は、個々人の、あるいは集団の狼狽・動揺に始まるのだという認識と、だからまず何よりも現状の冷静な把握の上にしかるべき対処の方途を歴史（ヴォーンの場合には主にバイブル）に照らして探らうという姿勢が垣間みられるのはこの一篇だけには限らない。これまで取り上げたどの作品にも大なり小なり言えるであろう。

\*

本稿は、二語が“and”で結合されている標題の作品を取り上げたが、その繋ぎ方が三通りであることに気付くであろう。

斜<sup>イタリック</sup>字体の“and”は、<sup>ヘンダイアデイス</sup>どうやら「二詞一意」(hendiads)を表示するものとみてよさそうである。「規則と教訓」は、「規則めいた」[模様の「教訓」、教訓を規則として示したものの]の、「混乱と脆さ」は、「脆さ故の混乱」、「混乱したせいで露呈された脆さ」の、意であろう。

「復活と不滅」は、復活するから即ち不滅だ、不滅故に復活するのだ、ということだ、ほぼ同じ意味の語を<sup>ローマン</sup>並み字体の“and”で繋いで強調したのだとみられるのに対して、コンマで切っておいて並み字体の“and”で結ぶ五篇の標題はどうなるのだろう。

「人間の墮落」には「回復」が必要だし、神が人間の姿で顕れた「受肉」故にその「受難」は神が人間に代って難を引き受けてくれることになるのだ。「愛」されるためには自らが「鍛錬」を積まなければならないし、神の救いである「福音」を得るには神の掟である「律法」を守らなければならない。ヤコブは「枕」にした石を建てて「記念

の柱」にした。要するに、深い関係にある両者が、コンマ付き“and”で結ばれているということである。このような違いは、二つの物・事・現象を同時に見据える作者の眼に、微妙な識別力が備わっていることを示すものであろう。それは、全く同じ標題の作品が二篇ずつ、あるいは、類似のものを表す標題作が複数収録されていることでも明らかである。それを更に検討することにした。

\*参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

- [A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.
- [B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.
- [BE] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.
- [BEI] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.
- [BEII] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*.



- London : The Hogarth Press, 1949. 1st. ed. 1929.
- [㉔㉑] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.
- [㉔・㉒] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [㉔㉑] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [㉑] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Student*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [㉒] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㉑] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』(研究社 一九七四) 二二―二五]°
- [㉑] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㉑㉑] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㉑] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㉑㉑] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.
- [㉑㉑] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [㉑] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [㉑㉑] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [㉑㉑-] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.

- [ $\text{H}\mathfrak{G}$ ] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [ $\text{H} \cdot \mathfrak{G}$ ] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [ $\text{J}$ ] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [ $\text{J}\text{H}$ ] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [ $\Sigma$ ] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [ $\Sigma \text{--}$ ] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [ $\Sigma \text{W}$ ] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [ $\Sigma \text{J}$ ] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [ $\Sigma \text{J} \text{--}$ ] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [ $\Sigma \text{J} \equiv$ ] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962. 1st ed. 1954.
- [ $\text{L}$ ] Petter, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [ $\mathfrak{L}$ ] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [ $\mathfrak{G}$ ] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [ $\mathfrak{G}\mathfrak{L}$ ] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity*

- College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933.* London : Faber and Faber, 1993. 「ロナルド・シュノーード編注『T・S・エリオット クラーク講演』村田俊二訳（松伯社 二〇〇一）」。
- [S・V] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry : Two Essays and A Bibliography.* Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.
- [T] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery.* The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [W] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform.* London : Macmillan and Co., 1889.
- [WG] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley.* New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
- [MH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience.* New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.
- [M-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George*

*Herbert.* Cambridge : Cambridge University Press, 2007.

〔川崎1〕「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四―九八。）

〔川崎2〕川崎寿彦『鏡のミニエリスムールネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二―五八。

拙訳での〈 〉付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

\* 本稿も二〇〇七年度成城大学文学部特別研究助成による成果の一部である。

本誌前号（二〇二号）誤植訂正

P・26下、5、6行 たまえ↓たまぐ  
同11行 相いまみゆる↓相まみゆる